

※「käsä」はフィンランド語で「手」という意味で、「手と手を取り合ってみんなで子育てしよう」という想いを込めて「käsikäsä」と名付けられました。



優しさを未来へつなげたい

多胎育児支援団体 käsikäsä※代表
かわべ 瑞恵さん(高月町井口)

多胎児家庭のための交流の場や各種講習の開催など、支援活動を精力的に行うkäsikäsäの代表、川部さん。活動のきっかけは自らの経験からでした。自身が双子を妊娠した時、多胎児妊娠は合併症や切迫早産などの恐れがあるハイリスク妊娠であるにも拘わらず、関連する情報が少ないことに気づきます。市内で学びや交流の場を探すも見つからず、孤独と不安だけが募る中、無事に双子を出産します。

始まった育児は、交互に夜泣きする子どもたちをあやしたり、2人分の食事や世話にかかりつきで、朝から夕方まで食事がとれなかったりと、とにかく必死だったと振り返ります。「妊娠期からむと情報があれば、今後について家族との話し合いや支援の把握など準備ができたはず」と情報の必要性を痛感します。育児期に入ってもなかなか出歩けず、やっとの思いで外出できても双子用ベビーカーが通行できない場所が多いなど、日常にある育児の悩みを共有できる場がなく、孤独感は深まっています。

の場を設けることを知り、川部さんは迷わず参加。「このチャンス逃してはいけない」と参加者と連絡先を交換し、その同月のうちに多胎児家庭が寄り合えるサークルを発足します。「終わらない夜泣きに絶望している時、サークルで共感し合えたお母さんの顔が浮かび、私だけじゃないと踏ん張れた」と地元で寄り合える居場所のありがたみを噛み締めます。

また、他の参加者にとって、サークルが多胎育児の共感の場としての役割だけでなく、心の支えにもなっていることを知り、寄り合える場の大切さを再確認します。

その後、子育て応援セミナーの受講や他県の団体からの学びを経て、一昨年2月、仲間とともにkäsikäsäを設立。団体での運営とすることで、関わり続ける人をつくれるだけでなく、幅広く情報を集めながら横のつながりも広げていけるといいます。その行動力と熱い思いを目にした人々が感化され、次々と協力の輪が拡大。行政との連携も進め、多胎児育児に対する不安軽減を図る支援事業など、活動の裾野を拡げます。

双子の育児と活動の両立に葛藤することもありますが、関わった人の「ありがとう」を糧に、活動を続けるための仕組みづくりにも「楽しみながら取り組みたい」と笑顔で語る川部さん。「多胎育児は大変ですが、伝えたいのはそれ以上に喜びや幸せがあること」。活動の中で触れた、たくさんの優しさを未来につなぎます。



わかば幼稚園

笑顔いっぱいわかばこ

歴史ある神前幼稚園が新築移転し、平成25年からわかば幼稚園として新たにスタートしています。本園では、8つの子どもの像を掲げ、その一つ「あいさつや返事ができる子」をめざして、朝のあいさつ活動をしています。



▲朝のあいさつ活動

ものです。保護者の皆さんからは、「子どもたちからあいさつをしてもらえると嬉しい」とや「気持ちいい」という声を聞きます。また、3・4歳児たちは、5歳児の姿に憧れを持ち成長しています。

あいさつを自分から交わすことで、子どもたちの自信の一つになり、心地よさも感じているようです。あいさつで、その日その時が気持ちよくなるという体験を通じて、人とのつながりを大切にする心を育んでいきます。

長浜子どものちかい ～わたしたちはちかいます～

- ー 元気にあいさつをします
- ー 名前を呼ばれたら「はい」と返事をします
- ー 「ありがとう」「ごめんなさい」をすなおに言います
- ー 困っている人がいたら言葉をかけます
- ー 人の話をしっかり聞きます

長浜子育て憲章 ～おとなが実践します～

- ー 子どもに誠実に生きる姿を見せます
- ー 見守るまなざし、叱る勇気を大事にします
- ー ルールとマナーを教え、奉仕の心を育みます
- ー 自然や人々に感謝の心でふれあう子どもを育てます
- ー 長浜に誇りをもち、地域に貢献する子どもを育てます



学校・教育関係の情報が満載
▲市教育委員会フェイスブック

人口と世帯数
令和3年5月1日現在

人口	116,347人(-97)
男	57,027人(-42)
女	59,320人(-55)
世帯数	46,763世帯(+90)
	()は前月との比較

長浜市の情報をスマホでチェック

長浜市 ホームページ	Facebook 長浜市ほっとにゅ～す	Facebook 長浜市教育委員会	Instagram #長浜ちょびつく	YouTube はま～るtb.	広報紙をスマホで マチイロ	イベント情報を配信 LINE